



同志社
歴史散歩
花岡山
辻橋三郎

花岡山
熊本は、森の都といわれている。戦災をうけていたにもかかわらず、熊本城に登ってみると、森の都の面影は失なわれていない。花岡山は、その熊本の西南に聳える、海拔一三三米の山である。春は山桜に、秋は紅葉に彩られた景観は、見る人の心を奪う。
私は熊本を訪れる度に、この山に登らない

ことはない。遙か東の果の大阿蘇を背景にした、森の都の全貌を、どうしてもこの目でたしかめたいという思いからされるのである。しかし、この山は、私をひきつけるもう一つの力をもっている。それは、この山頂が熊本バンド結盟の地という歴史に飾られているからである。

山に登る

熊本駅に近いこの山には、ドライブ・ウェイができていて。駅から、ものの二十分位で、山頂近く旧陸軍墓地がある。県令安岡良亮、時の鎮台司令官少将種田政明の墓を含む、神風連の乱（明治九・一〇・二四）に死んだ、いわゆる官軍戦死者の墓もある。参る人も少ないのか、荒廃の感じが深い。そこには、異色を放つ碑が、もう一つある。それは、寛永一二年一二月四日、花岡山禪定院で、切支丹禁令の犠牲となった加賀山マリヤの殉教記念碑である。主君細川忠利の切なる説得をしりぞけて散っていったマリヤの物語は、聞く者の涙をそそる。花岡山は、また、西南戦争に際して、薩軍が砲陣をしいて、熊本城を猛射したところでもある。その人たちも、多くは、西郷に殉じたであろうことを思うと、胸せまる

思いがする。

山頂

やがて、山頂である。ここでは、白いコンクリート造り、バゴダ様式の仏舍利塔が、いきなり目に入る。印度政府から贈られた仏舍利と、太平洋戦没将士の霊が祀られているとのこと。熊本人が仏舍利塔の花岡山と呼んでいる程、それは、山頂全域に偉容を誇っている。そのうしろ、まばらに木のある草地に、一間位の高さの角材に、「熊本バンド記念碑建設の地」の文字が読まれる。近代日本思想上、日本キリスト教史上、忘れることのできない歴史的事実の記念としては、余りにも寂しいそれである。実は、加藤清正が、熊本城築城の時、時刻を知らせるために、松の枝に鐘をかけて鳴らしたという、いわゆる鐘掛松の下が、正しくは、その地点なのであるが、今は、その松もなく、場所も少し違っている。

奉教趣意書

明治初年、薩長に立ち遅れた熊本藩は、その挽回を意図して、熊本洋学校を設立、教師として、南北戦争の勇士、キャップテン・ジョンズを、米国から迎えた。彼は、明治四年八月一五日、着任した。彼は、溢れるばかり

の清教徒的至誠と熱情とを以って、青年の教育に當った。やがて、青年たちは彼の敬虔な態度にうたれ、キリスト教に心をゆだねるに至った。明治九年一月三〇日(日曜日)早朝、

青年たちは、途中、幾組かに分かれて、花岡山頂に集合した。冬の山頂のことなので、南国とはいっても、寒気凜烈として肌をさした。一同は平地に坐して、天拝会、すなわち祈禱会を開いた。司会は金森通倫で、最初、ジェーンズに教えられた英語讃美歌を歌い、次いで、横井時雄が、英語聖書によって、ヨハネによる福音書第十章を朗読した。それから、古荘三郎が、用意していた誓約書である「奉教趣意書」を朗読した。要するに、「西教」を信じて「人民ノ蒙昧ヲ開キ「報國」の実をあげようというのである。いわば、キリスト教による新日本建設の決意の宣言なのである。そのあと三十五名の署名があるが、この原本は、今、同志社の所蔵となっている。

刷り上がったばかりの浮世絵を見るような、胸のときめきを覚える。

さて、この三十五名のうち、後、更に同志社に入学した者は、実に十七名の多きにのぼるのである。すなわち、宮川経輝、岡田松生、不破唯次良、蔵原惟郭、金森通倫、辻豊吉(後、家永)、亀山昇、海老名喜三郎(舜正)、下村孝太郎、加藤勇次郎、上原方立、徳富猪次郎(蘇峯)、森田久万人、伊勢時雄(横井)、浮田和民、市原盛宏、松尾敬吾といった人々である。この中で、同志社社長(総長)ならびに校長を兼ねた人は、横井、下村、海老名の三人、校長を勤めた人は金森、社長代理の職にあった人は市原、教員として同志社に勤務した者は、宮川、森田、浮田、加藤らであった。新島先生歿後、危機の同志社を背負って社長兼校長となった小崎弘道も、結盟には加わらなかったが、洋学校でジェーンズの薫陶をうけた一人であった。これを見ただけでも、草創期の同志社は、熊本バンド出身の人々の協力によって、発展したといっても過言ではなさそうである。しかも、海老名、小崎、浮田、横井、金森は近代日本のジャーナリズム形成に寄与した徳富と共に、日本思想史の

進展のために、顕著な業績を残し、宮川、海老名、小崎は、日本キリスト教会の確立に絶大の力量を示し、蔵原、横井、金森、市原は、政界、財界に、下村、森田は、学界に貢献した。近代日本に、前向きなエネルギーを供給した、これ程の集団は数少ない。

近代思想史の上で

過日、「思想の科学」が、明治初年の熊本を、熊本在住のグループの手でとりあげた(引用文献の示していないような粗雑な論文もあるが)。それは、早く、木下順二氏が戯曲「風浪」で描いたところであり、我々同志社大学人文科研キリスト教社会問題研究会もまた「熊本バンド研究班」を組織し、究明を続けてきたところで、すでに研究第一集を昭和三年三月に世に問うた。いずれにせよ、熊本バンドは、近代日本の倫理的基盤確立の第一声を放って、新日本の前進を促すという大きな役割を果たしたのであった。

花岡山は、以上のような、いろいろな歴史のあとを一身に集めて、熊本、ひいては日本の成長に伴なう、祈りと苦しみとを、集中的に表現しては、今もなお、心ある人をひきつけているのである。

(高校教諭、園語)